

ソニ
曾爾村の落合なる地の産で、杉林の下に広がる全体に暗紫色を帯びる常形の大群落中に 1 本あつたと云う。之を移植して開花させたものを 1953 年 10 月 6 日に腊葉に作られたる由。全株に全く紫糸なく、総苞片の縁辺膜質半透明（但し外側の短小片の先端又は縁にのみ着色することあり）、花冠は純白、葯は黄色、冠毛も常形の極く淡き茶色よりも更に淡い。これは明かに白花品と目し得るので、和名ユキヤツデ（雪入手）とし次の如く記載する。

Diaspanthus uniflorus Kitam. forma **niveus** Mizushima, f. nov.

A typo toto intense purpureo tincto haec forma tota planta viride floribus albis facile distinguenda.

Scapi cum foliis inflorescentiisque virides. Involucri squamae virides, margine anguste subhyalino-membranaceae, extimae abbreviatae interdum purpureo-marginatae. Corollae perfecte albae. Antherae flavae. Pappi albidii.

Hab. Hondo. Prov. Yamato (Nara pref.): Ochiai, Soni-mura, Uda-gun (Takao Kurokawa, Oct. 6, 1953)—Typus in Herb. Univ. Tokyo.

佐藤邦雄氏の信州軽井沢町、離山の採品に白花フシグロセンノウがある。莖葉に全く紫色を欠き鮮緑色、花冠は真白で黄葯を持つ。常品が莖の各節、葉身、萼等に暗紫色を帯びること多く、花冠朱赤色にて小豆色又は灰紫色の葯を有するに比すれば、また楚々たる感あり良きものである。本草図譜卷之十五、第二十四丁に“あきせんをう”の名の下に 2 品を図示し、其の左者は紛いもなく白花のフシグロセンノウである。同書には和称を見ぬ様であるから、新にシロガネセンノウ（銀仙翁）とする。尙草木図説卷八には白花あるを記し、又濃淡紫色等もあると言つて居り、矢田部先生の日本植物編には栽培品に濃淡紫色白色等ありとして居られる。紫花品は小生未知なので大方の垂教に俟ちたい。

Lychnis Miqueliana Rohrb. forma **argyrata** Mizushima, f. nov.

Corollis niveis, antheris flavis nunquam azureis, aut nodis caulium subtus foliorumque aut dentibus calycium non purpureo suffusis solo viridibus a plantis vulgaribus diversa.

Hab. Hondo. Prov. Shinano (Nagano pref.): Hanare-yama, Karuizawa-machi (Kunio Sato, Sept. 2, 1954)—Typus in Herb. Univ. Tokyo.

クサヤツデ 神奈川県西丹沢に産す (林 弥栄) Yasaka HAYASHI: A new locality of *Diaspanthus uniflorus* (Schultz.-Bip.) Kitamura.

クサヤツデは本州（東海道、近畿）、四国、九州に産することが知られている。近畿地方の紀伊半島や四国、九州では各地に群生しているのが見られるが、東海道ではその

産地が至つて少ない。今日までに知られていた分布の東限地は静岡市亀川山である（附近の志太郡瀬戸谷村倉田にもエンシュウハグマなどと共に産する。）伊豆半島にはあつてもよさそうに思われるがまだ採集したということを開かない。筆者は昭和29年10月16日神奈川県足柄上郡三保村の世附国有林（明神峠の北方）内の唯1ヶ所に10本ばかり小群生しているのを発見採集して来た。この地は天然分布の東限地でありまた北限地でもあらうと思われる。そして生じていたところが暖いところでなく、神奈川県の北海道といわれている県下で一番寒い地にあつたことも不思議な事実である。

ロベレイ博士の逝去 米国の植物学者 L. H. Bailey 博士は昨年12月25日に96才の高令で逝去された。博士は晩年まで元気に研究をつづけられ、多くの著書論文があり、特に栽培植物に関する代表的著述 The Standard Cyclopedia of Horticulture や Manual of Cultivated Plants は日本でも広く読まれ利用されている。(H. H.)

口辻永画伯の万花譜の出版 辻さんが昭和の初め頃に万花図譜正続12巻を出されたことは周知のことであるが、今日それに引きつゞいて、しかしそれとは全く別個に新たに12巻が編輯され、平凡社から世に出る事になつた。2月末に第6巻がでたが、印刷、解説、体裁いづれも二十数年の進歩がうかがえる。辻さんは大姿植物が好きで、折にふれて描かれた野の花、温室の花、園の花が美しく、しかもいかにもその植物の生々した姿で捕えられ、再現されている。第6巻は6月頃に咲く花を主として編輯され、頁一杯の図の対面に解説がつけてあつて、その花の特徴や歴史や逸話を知ることができる。この解説は園芸植物を佐々木尚友、久保田美夫の両氏が、野外植物を前川が引き受け、牧野先生が眼を通しておられる。各巻132図版、美装、箱入、1500円。3月に2冊の割で出る予定。(F. M.)

Errata 正誤 Vol. 30, No. 1 & 2 (1955)

page	line	for	read	page	line	for	read
5	22	glacile	gracile	36	7	inflorescences	inflorescences
35	27	-tsch. Adj. I.	-tch. Adj. I.	"	14	devolopped	developed
"	"	fall	falls	55	27	(1654)	(1954)